

— 会員寄稿 —

SOWER/Pacific 1999年集中観測に参加して

北海道大学大学院地球環境科学研究科 庭野 将 徳

1999年2月から3月にかけて、熱帯東部太平洋に位置するガラパゴス諸島のサン・クリストバル島でオゾンと水蒸気のゾンデ観測キャンペーンSoundings of Ozone and Water in the Equatorial Region (SOWER) /Pacific Missionの集中観測が行われた。私は、赤道域の水蒸気・オゾンに関する研究を行っている都合上、今回のキャンペーンに参加させて頂く機会を得た、ここでは、簡単にその報告を行いたい。

マイアミ国際空港で、NOAAからきたHolger Vömelさんと落ち合った京大の西さんとわたしは2月21日の夕刻、「赤道 (=Equador)」を意味する国エクアドルの首都キトに向けて飛び立った。機内では、左隣りに座っていたLaurence Olivierそっくりな男性に助けて頂きながら、右隣のメキシコ在住の女性とお米の話でもり上がった。その日のキト空港は天候が悪く、数回旋回した末、深夜12時過ぎに命からがら空港に降り立つことが出来た。着陸した瞬間に沸き起こった拍手は、札幌に戻ってきた今でも耳の中で鳴り響いている。空港の標高が2,800mである上に、到着当日の天候が悪かったため、最初のキト空港の印象は「身も心も凍えるほど寒い街」というものであった。しかし数日生活してみると、初日の印象とはうらはらに、からっとしたすがすがしい晴れの日が多いことがわかった。心配していた高山病にも苦しめられず、毎日街中を散歩してまわった。

今回、西さんとわたしがキトとサン・クリストバル島を訪問した最大の目的は、本プロジェクトに協力してくれている現地の機関Instituto Nacional de Meteorologia e Hidrologia (INAMHI)の人々やサン・クリストバル現地の関係者にSOWERの初期結果を報告し、プロジェクトの意義をさらに深く理解してもらうことであった。私たちは、キトに3日間滞在している間に、INAMHI側の担当者であるEnrique Paraciosさんと日程調整を行い、念願のセミナーが実現する運びとなった。

キトの気候にも慣れ、方向・方角もおおよそ理解してきた2月24日の日中、ガラパゴス諸島の最東端、島めぐりクルーズの出発地ともなっているサン・クリストバル島に向けて出発した。ガラパゴス諸島といえば、ビーグル号で航海したCharles R. Darwinが進化論に思い至った場所である。わたしたちは島による生物相の差を確認する暇もなく、Mario, Haime, jimmyさんらが働く観測所に毎日通い(写真1)、ゾンデが東西風の準2年周期振動にしたがって西に東に大きく流されることをパイロットバルーンで実感したり、英語とスペイン語の文章が入ったセミナーの配布物の作成に勤しんだ。

サン・クリストバルで最も強烈だった出来事は、下痢・発熱を体験したことであろう、医者であるMarioの兄が診察してくれたが、サルモネラ菌に感染したらしいということで、抗生物質を腰に2本も打たれた。そ

の後、サン・クリストバルに滞在している間、食欲が失せてしまった。過食気味だったこともあるが、注射にはもうこりごりだったからであるのは言うまでもない。また、ガラパゴス諸島固有の動物をいくつか見ることができた。ガラパゴスペリカン、数種のダーウィン・フィンチ、水蒸気を吐くウミイグアナ（写真2）、空色の足をしたブービー、喉嚢が真赤になったグンカンドリなどなど、ガラパゴスアシカ（オットセイ？）と海辺で昼寝したことも良い思い出である。

サン・クリストバルとキトで行ったセミナーは、それぞれ趣旨の異なるものとなった。3月2日夕刻に行われたサン・クリストバルのセミナーは、街外れにある展示センターのセミナー室で行われ、観測所の人々の他に、生物保護団体の方々、若者たちが集まってくれた。発表内容はサン・クリストバルで気象観測する意義、熱帯域の気候、オゾン、水蒸気分布の一般的特徴などで、SOWERの観測結果を交えながら、OHPで発表した、50人程収容できる会場がほとんど埋まってしまったことには驚いたが、質問が数多く出るなど非常に意義のあるセミナーであったと感じた。また、Holgerがゾンデの実物や観測データをその場で見せてくれたので参加者の多くが感心を抱いてくれたように思う。後で知ったことだが、当日、島の公共電波でセミナーの宣伝をして頂いたそうである（空港でチケットの変更をした時、窓口のお姉様に「あなた方の名前を知ってますよ」と言われた）

キトのセミナーは、サン・クリストバル、グアヤキルと移動し、エクアドルを去る前日の3月9日午前に行われた（写真3）、INAMHIの所長や気象部長に加えて、大学の学生たちも集まり、50人以上の観客に聞いて頂くことが出来た。こちらのセミナーは、SOWERの意義に加え、西さんとわたしがそれぞれ、熱帯域の対流圏、成層圏に焦点を当てた自分自身の研究を紹介するという趣旨になった。英語で発表し、スペイン語に翻訳されるという類稀なセミナー形式にも慣れ、自分でも納得のいく発表ができたと思う。セミナーの評価はのちのち聞くことになると思うが、とにかく自分たちのすべきことを達成できたという満足感で一杯であった。

今回のサン・クリストバル島におけるキャンペーンでは、Holgerを始めとした皆の努力で、貴重なオゾン・水蒸気データを得ることができた。また、今回のキャンペーンの成功は、西さんとHolgerのスペイン語学習を抜きに語ることはできない。エクアドルに来るのがHolgerは3度目、西さんは2度目だということもあるが、二人とも今回のキャンペーンに先だって、かなりスペイン語を勉強してきたようである。データをただ取らせてもらうだけでなく、お互いに理解し合い、さらにこちらからフィードバックすることの重要性を痛感した3週間であった。

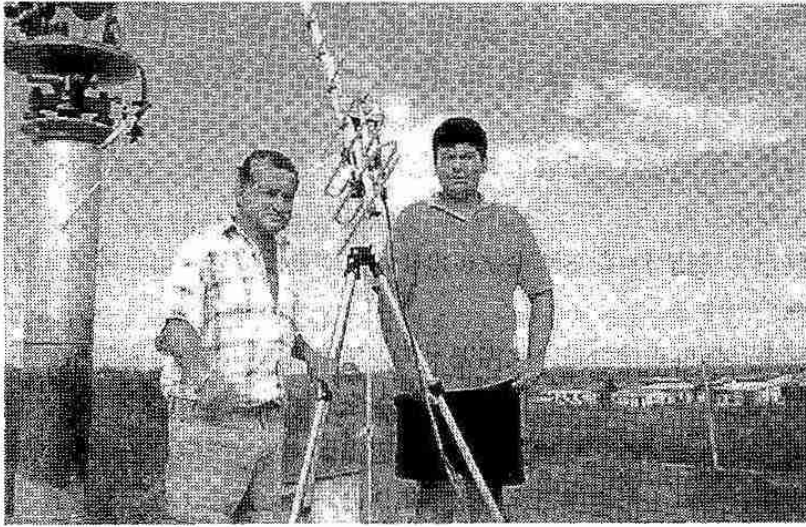


写真1：観測所の屋上にて、左から、Haime, Jimmy. 左端にある機械がパイロットバルーン

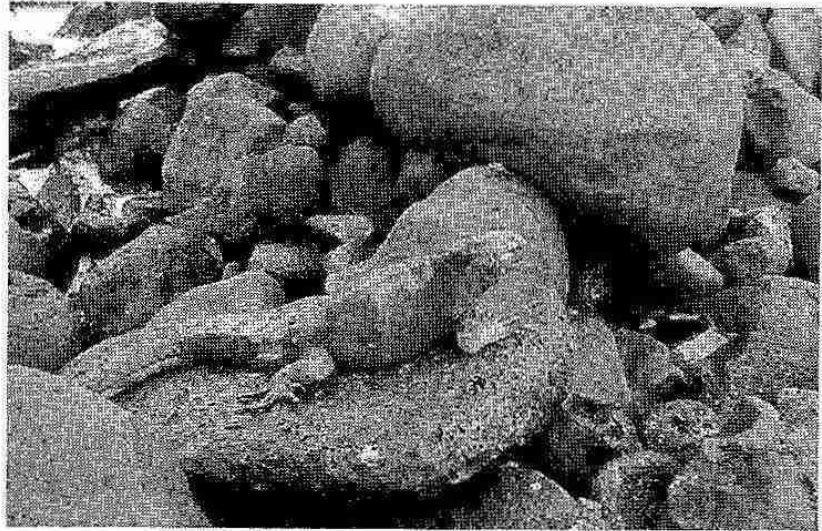


写真2：島の西側にあるロベリア海岸にて徘徊するウミイグアナ

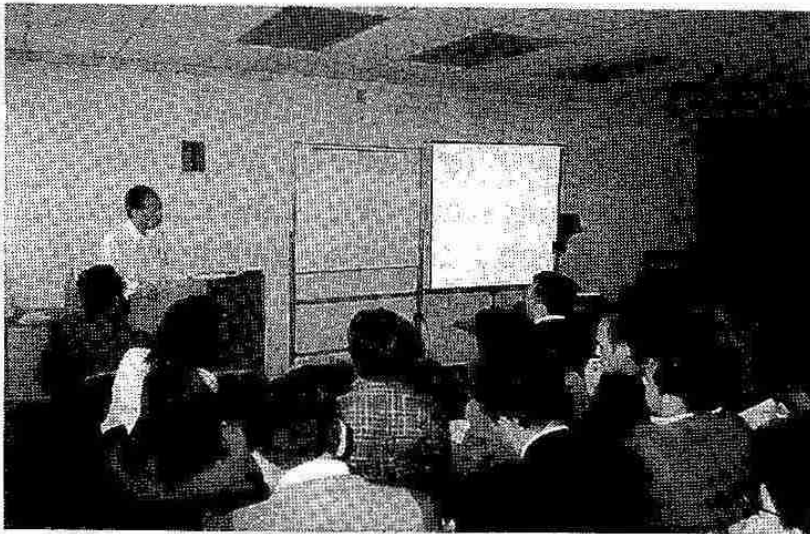


写真3：INAMHIで行われたセミナー，壇上で話すのはEnriqueさん